

斎藤徳元 六回

伊藤浩睦

徳元は、七十一歳で江戸へ下る四年前に、岐阜城陥落後に高野山に登って赦免されることのないまま亡くなった織田秀信の墓に詣でています。江戸へ行ったら高野山を訪れるのも難しくなりますから、京都にいるうちに出かけたわけで、この頃から江戸行きを考えていたことが窺えます。

岐阜城が陥落した時には、徳元は墨俣の領主であり、岐阜の町奉行も務めていました。合戦にも参加して城を守って戦いましたが、池田輝政、福島正則という尾張出身の猛将の攻撃によって、一日で織田信長が築いた岐阜城は陥落して、織田秀信は降参することになります。徳元は具足も太刀も捨てて女性の着物を被って長良川を北に渡って逃げました。

惨めな忘れられない経験であり、難攻不落と言われた城に入りながらの完敗で、自分たちはここまで弱かったのかと情けない気持ちにもなりました。しかし、武士を捨て去る気持ちにはなれなかったようで、そのことを示しているのが徳元の辞世の歌とそこに書かれた名前です。

例ならず心ち死ぬべく覚えて

末期には死にたはごとを月夜哉

従五位下豊臣斎藤斎頭 帆亭徳元

辞世は、「いつもとは違って死ぬ心地を覚え末期におよんで戯言をつく」といった意味で、「月」は戯言を「つき」に掛けられています。死ぬ心地を覚えたというのも道理で、このとき徳元は八十九歳でした。当時としては大変な長寿です。

「帆亭」は、晩年に徳元が名乗っていた雅号で、布袋に掛けられています。その前の名乗りが、「従五位下豊臣斎藤斎頭」となっています。「斎頭」とは斎宮頭のことですから、死ぬに及んで、「大坂城内で大名並みの待遇を受けていた昔の思い出を捨てることができない。俳諧、和歌、連歌をこなす文化人としての名が世の中に出ていても、最後は豊臣姓の斎宮頭として逝きたい」という気持ちだっ

たのです。

美濃守護代の血筋で、斎藤道三の血も引いている自分が、文人になってしまったことに対して忸怩たる気持ちを、亡くなるまで整理できなかったのかも知れません。

最後に余談になりますが、斎藤道三の父親の長井新左衛門は京都の西郊の西ノ岡の地侍で、出家、油売りを経て美濃にやって来たとされています。以前は、この経歴は道三一代のものとされていましたが、今では親子二代の経歴であるとされています。

また、松永貞徳の父親は連歌師の松永永種です。永種に関しては、室町十三代将軍足利義輝を殺害し、奈良東大寺の大仏を焼いた梟雄、松永久秀の子であるとする説が古くからあります。違うとも言いますが、もしそうだとしたら、江戸初期の俳諧の大物指導者の二人は、戦国時代の梟雄と呼ばれた人の子孫ということになります。松永久秀は西ノ岡の出身と伝わっていますから、先祖の出身地も同じということになります。徳元と貞徳には、先祖からの因縁があったということになれば、歴史小説の題材にもなりそうです。

(終)